

FILM 168

藤原帰一 「映画の記憶」 ま、いいか まあよくない!

・スコット監督とラッセル・クロウがケイト・ブランシェットを迎えて描くハリウッド超大作。ちよっと楽しみになるところ。

リドリー・スコット作品としてみれば、これは『グラディエーター』のやり直し。ローマ時代の剣士を主人公とした『グラディエーター』では、いちばん魅力的な戦闘シーンが映画冒頭に展開して、それはそれは見事だったんですが、その場面が終わると一気にしぼんで、映画の最後になっても緊張感が戻らなかった。『ロビン・フッド』は逆に、映画の最後の戦闘シーンに全力投入という仕掛けです。

そのロビン・フッドを、『グラディエーター』のリドリー・



©2010 Universal Studios. ALL RIGHTS RESERVED.

『ロビン・フッド』

リドリー・スコット監督作品。監督とラッセル・クロウが組むのはこれが5作目。12月10日から東京・有楽町のTOHOシネマズ日劇ほか全国で公開

巧みな監督ですが、今度の焦点は弓矢。刀で切られるのとまた違った怖さですね。ギリギリと引き絞った矢を引き放った瞬間に飛び散る汗が、異様にクリアなスローモーションで映し出される。戦闘シーンは上出来です。

でも、その間に力がない。お話は、弓の名手ロビン・ロングストライドが義賊になるまでの、いわばロビン・フッド誕生物語。重税に走る専制君主ジョンと、フランス王と密かに組んだ奸臣ゴッドフリーが敵役、それにロビンが立ち向かうわけですが、本編なしの予告編を、思いつきり長く伸ばした印象です。

さらにいえば、どうして口

ビン・フッドの映画をいま作ったのか、わからない。誰でも知ってるヒーローをつかまえて一本撮ったとしたか思えないですね。それに、一本では終わらない。「そして伝説が始まった」という終わりのタイトルには、当たったらもう一本という狙いが丸出しです。上出来の娯楽なんだから、ま、いいかというべきなんでしょう。でもね、リドリー・スコットほどの監督、そしてケイト・ブランシェットほどの俳優がこの程度というの、情けない。ここは断固として、まあよくない、と申し上げておきましょう。

ふじわら・きいち・悪女を見るなら「月光の女」『哀愁の湖』上海から来た女、そして真打ち「深夜の告白」。

BOOK

石飛伽能 「読まずにはいられない」 「これは将来の自分」 つきつけられた現実

〈本籍・住所・氏名不詳、年齢55歳から75歳の男性、白髪混じりの短髪、着衣は黒色ワイシャツ、所持品は現金35円。上記の者は、×年×月×日×時×分×秒、某所にて死亡しているところを発見されました。死因は縊死。遺体は火葬に付し、遺骨を当市にて保管しています〉

ある日の官報に掲載された行旅死亡人欄の一部。行旅死亡人とは身寄りのない人、身元不明のまま亡くなった人の

こと。地方自治体が火葬して遺骨を保存し、その情報があるとして官報に毎日掲載されるNHKスペシャルのスタッフフは、この現象を「無縁死」、それが水面下で増え続ける現実を「無縁社会」と名付けた。今年1月からさまざまな切り口で放映を続け、こうしてメディアを超えるほどの反響を呼んでいる。

ごく普通の人生を歩いてきた人物が、ささいなきっかけで職を失い、家族を失い、誰

にも看取られず、ひっそり息を引き取る。数カ月たってから発見されることも珍しくない。取材班の地道な聞き取り調査によると、その数は年間3万2千人。

行旅死亡人の生前の足跡を辿っていくうちに、家族に引き取りを拒否される遺骨が急

『無縁社会』

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編著

(1333円+税/文藝春秋)

誰にも看取られず死を迎える高齢者たち。孤独死はもはや他人事ではないのか？ 社会の闇を追い、大反響を呼んだ番組を軸に再構成したノンフィクション

photo 編集部・東川哲也

増していること、「特殊清掃業者」という遺品整理ビジネスが誕生していること、亡くなった後にももろの手続きをしてくれるNPOに高齢者の申し込みが殺到していることなどが明らかになる。

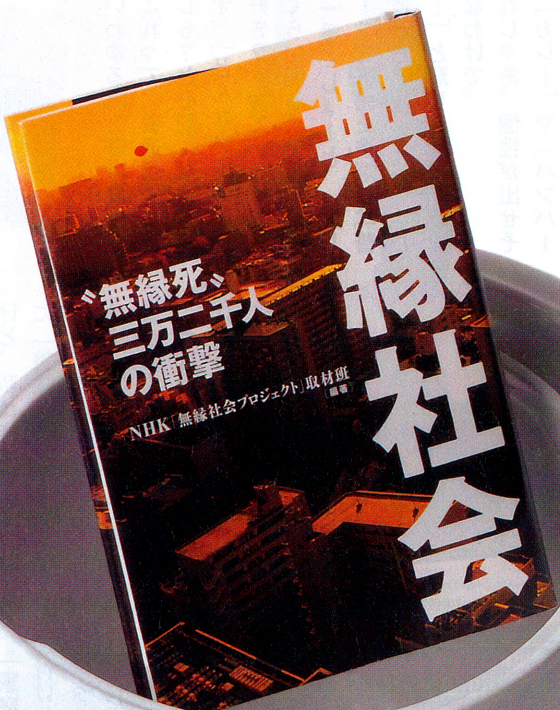
こうした実態もさることながら、恐ろしいのは30代、40代の働きざかりがこの番組を観て、「将来の自分」とネットに書き込み、悲観しているという事実だ。

ヨーロッパは高齢国家に移行するのに100年かけた。

日本はずか4半世紀で一気にその仲間入り。核家族化、少子化、未婚化、共同体を嫌い、気軽で楽なおひとりさまの道を選んだ結果である。さらに、リーマンショック以降の不景気が孤立化に追い打ちをかけた。その末に「無縁死」のリスクが待っていることを予想する暇さもなく。

見ないふり、直視する余裕のなかったニッポンの足元を見つめ直す一冊。

いしとび・かの・フリーライター。編集プロダクションを経て各誌で書評・健康・情報記事執筆。



漫画「銀のアンカー」に学ぶ 就活脳の作り方

辻 秀一著

(1200円+税/集英社インターナショナル)

漫画家・三田紀房さんの妙味は比喩だ。就活がテーマの『銀のアンカー』でもそれは最大限に発揮された。内定請負人の主人公は、自己分析に悩む就活生に「自己商品化計画」を考えよと言いつつ、商品を作る「品質・流通・広告」の三原則を就活に当てはめれば、品質は人間性、流通はエントリーすること、広告はエントリーシートや面接でのパフォーマンス。なかでも流通が一番大切だと説く。

突拍子もなさそうなアドバ

イスにも意味が凝縮されている。無名私大の就活生たちを自分の別荘予定地に連れて行き、「家を建てる」と命じる。曰く、「企業が求める、当たり前の身につける。それは頑張ることだ」。こうした至言によって、登場人物たちは成長していく。そこに着目したのが、医師としてスポーツ選手をメンタル面から支えてきた著者だ。悪い状況を悪いと認知して落ち込むのではなく、どんなときも揺らがないければ、脳は勝利に結びつく。そんな「フロイド理論」が三田漫画にはあるのだ。

大卒の就職内定率の悪化が伝えられる。悪い状況を打破したいなら、ドクターお墨付きのメンタルトレーニングで、漫画の登場人物たちのように熱くなってみよう。(波)



『仕事のできるあなたが、なぜリストラされるのか』

砂山廣三郎著

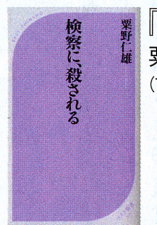
(1500円+税/ダイヤモンド社)

本書を「全サラリーマンへの危機脱出指南書」と言い切る著者は、元大手自動車メーカーのサラリーマンだ。

自らもリストラを経験し、以後、キャリアコンサルタントとして大手企業のリストラの手伝いなどをしてきた。

リストラを「される側」と「する側」。その両面を知る稀有な人物だけに、本書で展開されるエピソード、そして解説にはうならされる。

ただ、両面を知るといって、著者は本心ではどちらの側に立っているのだろうか。そこが気になった。もちろん、簡単に線引きできる話ではないのだけれど。(丁)



『検察に、殺される』

栗野仁雄著

(743円+税/ベスト新書)

検察なんて、私たちの日常にはほとんど関係ない。そう思っていた。

検事による証拠改竄事件から2カ月。検察が人々を陥れていく過程をつぶさに描いた一冊が発売された。普通に生活をしてた市井の人々が犯人に仕立てられていく過程は臨場感たっぷりだ。

問題の一端は検察の「創作調書文化」にあるという。「検事などやめてさっさと小説家にでもなるべきだ」と著者は糾弾する。検察改革を説く検察OB・郷原信郎氏との対談も必読だ。逮捕された検事達の公判は来年からいよいよ始まる。(〇)